

シ ラ バ ス

【選択領域】

講座記号	講 習 名				
C-1	近年の中世和歌を中心とした、気になる研究紹介とその検討				
担当講師	時間数	日程	主な受講対象者	講習形式	試験の方法
佐藤 茂樹	6時間	8月11日	中学校・高等学校国語科教諭	講義	筆記試験
講 習 概 要					
到達目標	最新研究の理解				
I・II 9:00～10:30	<p>式子内親王の「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶことの弱りもぞする」は、女歌の忍ぶる恋の絶唱と考えられてきたと言えるが、忍ぶる恋は男歌にこそ相応しいとする、後藤祥子氏の論文を紹介し、その意義を考える。</p> <p>藤原俊成は中世歌壇において重鎮であった。その歌合判詞は絶対的権威をもっていたと考えられるが、現実には必ずしもそうではなかったとする、安井重雄氏の考察がある。それら具体例を紹介し、その意味を考える。等注目すべき論文を紹介する。</p> <p>また、「祇園精舎の鐘の声」はどんな音であったか、まどみちおの「ぞうさん」の真意は、小象と子どもとの仲むつまじい心のつながりにあるのではなく、子どもに虐められた小象への応援であるなど、教育現場において役立つ知識を可能な限り紹介する。</p> <p>加えて、『解釈』に掲載された、国語教育の実践や論文を紹介する。</p>				
III・IV 10:40～12:10					
V・VI 13:00～14:30					
VII・VIII 14:40～16:10					
試験について	選択肢客観問題				

シ ラ バ ス

【選択領域】

講座記号		講習名			
C-2		日本古代文学			
担当講師	時間数	日程	主な受講対象者	講習形式	試験の方法
森 斌	6時間	8月12日	中学校・高等学校国語科教諭	講義	筆記試験
講習概要					
到達目標	万葉歌の理解を深め、正岡子規の云う写生の意味を理解する。				
I・II 9:00～10:30	<p>平城遷都千三百年という記念の年に、万葉集を中心に八世紀の文学を考える。天平文化が当然その中核であるが、言語文化も古事記・日本書紀・風土記を含めて誕生している。しかし、今回は、憶良、赤人・旅人、家持という万葉歌人に焦点をあてたい。</p> <p>一 山上憶良 二 大伴旅人・山部赤人 三 大伴家持 四 遣新羅使、遣唐使と和歌文学</p>				
III・IV 10:40～12:10	<p>以上四時間を上記のテーマで講義する。</p> <p>※テキストは、こちらでプリント等を準備する。予習の必要はないが、中学・高校の教材に登場している万葉歌を主に取り上げたい。</p>				
V・VI 13:00～14:30					
VII・VIII 14:40～16:10					
試験について					

シ ラ バ ス

【選択領域】

講座記号	講 習 名				
C-3	日本語史的視点から教科書を見る(日本語の文法)				
担当講師	時間数	日程	主な受講対象者	講習形式	試験の方法
柚木 靖史	6時間	8月13日	中学校・高等学校国語科教諭	講義	筆記試験
講 習 概 要					
到達目標					
I・II 9:00～10:30	<p>1 複数の教科書における文法説明の違いを把握すること 2 日本語史的視点に立って、教科書の記述を吟味すること 3 文法説明、作品の表記が揺れている事象を、生徒にいかに教えるべきかを検討する</p> <p>第1回 教科書間の文法説明の違い</p> <p>教科書によって文法説明が異なる事象がある。例えば、完了の助動詞「り」の接続の説明については、已然形接続とするもの、命令形接続とするもの、両説を併記するものなどがある。サ変動詞についての「せり」の形についても、「せ」を未然形とするもの、命令形とするものなどがある。</p>				
III・IV 10:40～12:10	<p>本授業では、このように、教科書によって文法説明が異なる例を紹介し、複数の文法教科書を見比べることの重要性を認識し、さらには文法説明のあるべき姿について検討する。さらにそれらの検討を踏まえ、実際にこれらの文法事象を生徒にどのように教えるかを話し合っていきたい。</p> <p>第2回 教科書間における古典作品の表記</p> <p>古典の教科書では、『源氏物語』の冒頭部など、同じ作品の同じ箇所を取り上げているケースが少なくない。それらを付け合せ見比べてみると、多くは本文は『新編日本古典文学全集』によるとしながらも、その本文と同じではなく、教科書編集者の意向がくみ取れる。例えば、「御」については、ルビを振って積極的に読みを確定させているもの、ルビを振らないものなど、さまざまである。</p>				
V・VI 13:00～14:30	<p>もとより原文の「御」にルビはないので、ルビを振っているものについては、ルビが正しいかについての検証が国語史の見地から確認される必要がある。ルビが振られていないものについては、生徒に朗読させる際、どのような指導を行うかという技術の問題が生じる。これらを、踏まえながら、教科書間における古典作品の表記の問題について検討する。</p>				
VII・VIII 14:40～16:10					
試験について					